

●●●●●●●●●● 18歳までは小児科で ●●●●●●●●●●

日本小児科学会の推奨に従い、当院では、18歳(高校生)まで小児科で診察いたします。対象の方は、原則、小児科へご案内いたします。なお、他科受診を希望される場合は、お申し出ください。

リレーでお届け病気の話 「誤嚥性肺炎」について (言語聴覚士のお話) リハビリテーション科 増田尚加

当院では、誤嚥性肺炎を予防するために、職種の異なる医療従事者(多職種)が連携、協力し患者さんの状態改善に取り組んでいます。今回は、久岡医師からバトンを受け取りました「言語聴覚士」の立場から誤嚥性肺炎のリハビリについてお話します。

※言語聴覚士：言葉を話す、聞くといったコミュニケーションや、食べ物を食べたり、飲んだりすること(嚥下)に困難を抱える方を対象にリハビリを行う。

まず、誤嚥性肺炎を予防するために、誤嚥(食べ物や飲み物が誤って肺へ入りこむ)が疑われる症状を知っておきましょう。

▶食べ物や飲み物でむせるようになってきた ▶食後に痰が増えたり、ガラガラした声になる
▶食べていない時でも、痰がガラガラしている ▶寝ているときに咳がでる など

入院患者さんで、上記のような症状がある場合、言語聴覚士は、医師の指示を受けて評価やリハビリを行っています。評価では、実際にゼリーや水分を使用し、患者さんの飲み込みの状態を確認します。どこに問題があるのかを検討し、患者さん一人ひとりにあった誤嚥しにくい姿勢や食事形態の工夫を提案します。また介助が必要な患者さんの場合、家族など介護者に対して安全な食事介助方法の指導を行うこともあります。

例えば、健康な方にとって“水”は、ごく一般的な飲み物ですが、飲み込む力が低下した方にとって、水などの液体は食べ物よりも喉を流れるスピードが速くなり、誤嚥しやすくなります。水分や汁物にはトロミ剤を使用すると、水分がゆっくりまとまって流れるようになるため誤嚥を防ぐ効果があります。

患者さんとのリハビリでは、食べるために必要な口腔器官(舌や唇など)の筋力訓練や、誤嚥してしまった時にせき込む力をつけるための呼吸訓練などを行います。

また、栄養サポートチーム(NST)とも連携し、医師・看護師・管理栄養士・臨床検査技師・薬剤師・歯科衛生士など、それぞれの専門分野と意見交換をし、総合的に『栄養面や安全に食べることに』に対して取り組みを行っています。

次回は、栄養管理のプロ、管理栄養士にバトンを渡します。



✿ボランティア連絡協議会活動報告✿

<6・7月の活動> ありがとうございました

6月30日(木) ボランティア連絡協議会(七夕飾りつけ)

7月8日(金) ボランティア連絡協議会(七夕飾りかたづけ)

☆願いが叶う短冊の書き方!?

縦書きで書くこと。消せるペンや鉛筆は避けたほうがよいそうです。

願い事を書いたら、短冊の空いているスペースに、自分の名前と生年月日を書くことを忘れずに。書いた願い事は声に出すことで、自身の気持ちを強くするとともに、思いが届きやすくなるそうです。来年、試してみたいかでしょうか。

<おねがい> 受診の際には、必ず『おくすり手帳』をご持参ください。